

ポローニア

paulownia



絵:「幻想の孤島」岡田愛美利(附属視覚特別支援学校 高等部1年)

目次

教育長挨拶

巻頭言「桐の伝統と変化の覚悟」◆茂呂雄二……………2

平成29年度 筑波大学附属学校教育局主催

教員研修会・附属学校研究発表会を開催

◆附属学校教育局学校支援課……………2

宮本俊和教授 学会大会長をつとめる ◆徳竹忠司……………3

ハワイ大学STEMS² 教員研修の報告 ◆濱本悟志……………3

日本インドネシアアンバサダープログラムに参加

◆建元喜寿……………4

ハワイ児童交流会を終えて ◆鷺見辰美……………4

香港から 教育訪日団来校 ◆那須和子……………4

「小さな文化祭」のような公開講座 ◆澤田英輔……………5

オリンピックに学ぶ ～視野を広げ、目標に向かうこと～
◆國川聖子……………5

造形芸術科「第28回卒展」◆藤本裕美子……………6

東京都肢体不自由特別支援学校ハンドサッカー大会
優勝 ◆佐々木高一……………6

“第1回”のびのびまつりを開催しました ◆河場哲史……………7

附属高校とのミニ交歓会 ◆石井裕志……………7

『ミライの体育館』を活用した交流活動 ◆當眞正太……………7

第13回「科学の芽」賞 募集要項……………8



桐の伝統と変化の覚悟

附属学校教育局教育長 茂呂雄二



YUJI MORO

2018年4月より教育長になりました茂呂雄二です。2010年から4年間附属高校の校長を務めておりました。ふたたび附属学校で仕事ができること大変楽しみです。

この冊子の名前ポローニャは桐を意味しますが、恥ずかしながらそのことを知ったのは昨年でした。いま大学が連携を進めているオハイオ州立大のゲストに、校章の意味を説明するため英語の辞書を引いて知ったのでした。オハイオ州立大学と附属学校群との間で創造的で発展的な関係を作り上げることができそうに期待しています。

さて、現在国立大学附属学校園を取り巻く環境は、厳しいものとなっています。公立私立の学校とは異なる存在理由や成果が求められ、脳科学やAI等の科学技術のホットな動きを取り入れることが課題となっています。長い伝統を尊重しながらも、大胆に変化していく覚悟が必要になるのだと思います。そのような覚悟もまた、本学の伝統でありました。「名のみなる廃墟をすてて醒めて起て」（宣揚歌（桐の葉）1番）どうぞ宜しくお願いします。

黒田日出男 東京大学名誉教授



平成29年度 筑波大学附属学校教育局主催

教員研修会・附属学校研究発表会を開催

附属学校教育局学校支援課

平成30年2月24日、筑波大学附属学校教育局は、東京キャンパス文京校舎において「教員研修会」及び「附属学校研究発表会」を開催しました。当日は、附属学校教諭、大学教員、学外関係者など100名近い参加がありました。

教員研修会は、学内外の教職員及び教育機関関係者に対し研修の一環として、幅広い知見を得ることを目的に開催しており、今年度は東京大学名誉教授 黒田日出男先生による「神護寺の伝源頼朝像と善光寺の源頼朝像」と題した講演がありました。黒田先生ご自身の経歴を伺いながら、専門以外の方でも分かりやすく興味深いお話を頂きました。

附属学校研究発表会は、筑波大学の附属学校及び附属学校教育局における日頃の研究成果を発表し、広く参加者から意見を求めることを目的に開催しており、今

年度は「附属学校の新たな挑戦－筑波大学附属学校群からの発信－」を研究主題として、附属学校及び附属学校教育局が取り組んでいるプロジェクト研究、グローバル教育及びインクルーシブ教育から5つの研究発表と附属学校教育局 宮本信也教育長による「筑波大学附属学校のこれから」と題した講演及び「各校における研究の取り組み」をテーマにしたポスターセッションを実施しました。会場の参加者からも質問や意見が寄せられ、各附属学校が取り組んでいる研究活動や実践の内容を知る機会となりました。

研究発表会



2018年3月10日(土)・11日(日)の二日間にわたり、第43回日本東洋医学系物理療法学会学術大会が、理療科教員養成施設 施設長 宮本俊和教授を大会長とし、東京キャンパス文京校舎で開催されました。本学会は、理療科教員養成施設の初代施設長であります、故 芹沢勝助(せりざわかづすけ)教授が創始した学会であります。学会の特長の一つは視覚障害を有する会員が多く参加していること、学会名が表すとおり東洋医学的な物理療法に関する基礎研究・臨床研究を行っているところにあります。なかでも、あん摩・指圧といった「手技療法」と「鍼通電療法」をメインテーマとして活動をしています。

第43回の大会テーマは「腰痛の新しい概念と治療戦略—鍼通電療法、手技療法、運動療法の実際—」となっております。宮本教授は大会テーマと合わせ、ご自身の活動のメインテーマでありましたスポーツによる障害や外傷と、東洋医学的物理療法に論点をおかれ、大会長講演として

「スポーツ領域の腰痛と治療の実際」というテーマでご講演をなさりました。講演の冒頭で、ご自身が養成施設に入学された当初の研究テーマが「腰痛に対する鍼灸治療の文献的研究」であったこと、当時の文献検索は電子データが無かった時代のため、全て手作業であったことなど、38年前の思い出にも触れられ、最後にスポーツ選手の腰痛に対する治療法の見解を述べられて講演は終了となりました。

文京校舎正面に掲示した学会案内



ハワイ大学STEMS² 教員研修の報告

附属学校教育局次長 濱本悟志

文部科学省の国際協働プログラム事業として、筑波大学及びお茶の水女子大学の附属学校教職員16名が、

オアフ島とハワイ島で2週間のSTEMS²教育メソッド研修を行いました。STEMS²とは、従来のSTEM(科学、技術、工学、数学)教育にS(Social Science:社会科学)とS(Sense of Place:場の感覚)という文系型発想力を融合した、ハワイ大学教育学研究科が開発した教育手法です。

派遣チームは、ハワイ大学の先生方と寝食を共にしながら、手付かずの大自然(キラウエア火山や原生林等)、農場(再現したプランテーション、タロイモ、サツマイモ、コーヒー豆)、各種施設(真珠湾国立公園、ボルケーノ国立公園、ハワイ州立自然エネルギー研修所、イミロア天文学センター

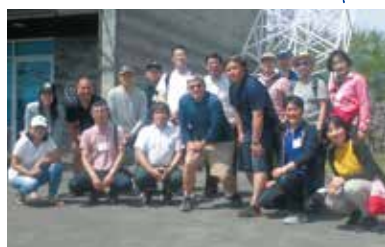
等)、STEMS²教育を実践する3校を訪れました。各訪問先のフィールドワークでは、まず「Sense of Place」でその地の特色と課題を感じ取り、過去・現在・未来、地球と宇宙、人と自然、人と人、個と全体、伝統と開発等の関わりを「STEM」で深掘りし、「Social Science」で統合させながら、児童と生徒を対象にしたアクティブ・ラーニングのプログラム開発を行いました。

これらの成果は3月22日の事業報告会及び成果発表会でお伝えしましたが、さらに児童生徒の年齢や特性に合った具体的なプログラム展開案として発信する予定です。楽しみにお待ちください。

イミロア天文学センターでの研修



サツマイモ農場での実習



ハワイ州立自然エネルギー研究所での集合写真



原生林でのフィールドワーク

日本インドネシアアンバサダープログラムに参加

附属坂戸高等学校は、平成29年度、はじめて公益財団法人イオンワンパーセントクラブのティーンエイジアンバサダー（高校生交流事業）の参加校に選ばれました。1990

附属坂戸高等学校 主幹教諭
建元喜寿

年から開始された高校生交流事業は、日本と海外の高校生が、政府訪問などの「大使活動」、授業体験やホームステイなどの「交流活動」、文化遺産への訪問や伝統文化を体験する「歴史・文化活動」を通じて、互いの国の歴史や文化を理解し、友好親善を深めます。

本校が参加したインドネシアとの交流プログラムは、両国の生徒各16名計32名が参加し、両国で各1週間の日程で実施されました。今回参加した生徒の中には、インドネシア留学を希望する生徒もでるなど、大変、有意義な交流となりました。このような機会を提供していただいたイオンワンパーセントクラブの皆様に感謝申し上げます。



ハワイ児童交流会を終えて

附属小学校 グローバル教育委員長
鷺見辰美

ハワイ大学でのタロイモ畑作り体験、現地小学生と交流しながらのロボット作り、ハワイ文化に触れる体験、現地児童とのワークショップ交流等、充実した日々を送ることができました。

ほとんどの児童が、簡単な英単語を知っているレベルでの交流でしたが、短いフレーズや動作で意思疎通をしながら活動を楽しんでいました。STEMS2をベースにした体験活動が中心の交流であったこと、現地の小学生の子と毎日継続的に交流できたことが、大きな充実感を得ることにつながったように思われます。また、ハワイ大学附属小学校の児童との交流は、事前に準備をした日本の遊びを伝える活動を軸に進めたので、より意欲的な活動につながることができました。

言語習得まではいきませんでしたが、児童のグローバル意識がぐんと成長する9日間になったと思います。

香港から 教育訪日団来校

附属高等学校 副校長 那須和子

平成30年2月27日、香港より38名の教育訪日団の皆様が来校なさいました。メンバーは、香港の小・中・高の先生、校長・副校長の方々です。

当日は、本校の概要説明の後、福元千鶴教諭による2年生の倫理の授業を参観なさいました。内容は「価値を問い直す」という主題。同時通訳の方も教室の隅から、難しい内容を訳して、先生方に発信してくださいました。一見難しい課題にも、生徒たちが活発に発言しながら授業が進む様子に、先生方も熱心に参観され、参観後の本校社会科教諭とのディスカッションでは時間が足りなくなるほどの質問を出してくださいました。

日頃、多くの国から参観の方がお見えになります。いつも、質問を受けるだけになっていますが、できれば、先方の国の教育事情をゆっくりお聞きしたいと思うこの頃です。





「小さな文化祭」のような 公開講座

附属駒場高等学校 主幹教諭
澤田英輔

2018年3月、うらかな
な好天のもと、少し早
い桜に囲まれた本校で、
地域の方向けの公開講座
が開かれました。

この講座は、筑波大学の社会貢献プロジェクトの財政的支援を受けて始まった地域貢献事業「筑駒アカデミア」の一環として、目黒区・世田谷区の方を主な対象として、無料で開催しています。今回も本校教員が講師を務める「ワインから見える世界史 その5」、外部講師をお招きしての「つい人に教えたくなる樹木のはなし」、「Brush Up Your English」、「子どもを伸ばす親（大人）に共通するただ一つのこと」、「将棋を楽しむ」（生徒も参加）、生徒が中心となつての「はじめよう！ ジャグリング」、「いろいろな多面体をつくろう」、「高校生といっしょに実験してみよう」と、8つの講座を開催しました。

当日集まったのは、80名以上の小学生を含む、200名以上の地域の方々。校舎の中では、英語での楽しい会話に弾む声、ワインから見た歴史の話に耳を傾ける参加者の姿。校舎の外では、校内の春の植物を散策する姿、本校生徒が小学生にジャグリングのやり方を丁寧に教える場面…。普段の学校とは異なる「小さな文化祭」のような風景があちこちに見られ、部活で登校した他の生徒たちも、少しうらやましそうに眺めていました。

この公開講座は、本校と地域の方の交流や地域貢献の場となっているだけでなく、生徒にとっても、外部の方、特に小学生に教えることを通じて学ぶ貴重な場となっています。現在は開催費用について課題があるものの、今後も継続を模索したいと考えています。



オリンピックに学ぶ ～視野を広げ、目標に向かうこと～

附属中学校 オリンピック教育担当 國川聖子



2月23日、元オリンピック（フェンシング）の千田健太さんをお招きし、中学1・2年生を対象として学年ごとに時間をもちました。

ねらいは「運動・スポーツ・健康について、視野を広げる」「スポーツを通して、目標に向かう姿勢、自分との向き合い方、周囲の方々とののかかわり方を知る」「目標をもって努力を続け、人間として成長していこうというオリンピックの精神を学ぶ」としました。

まず、講演の中で千田さんには、「フェンシングとの出会いからオリンピック出場」、「現役引退とその後の取り組み」等、様々なご経験を時系列で語って頂きました。次いで、希望生徒が、フェンシング体験キットを着用し、実技の中でフェンシングの持つ面白さに触れることができました。講演を通して生徒達は、千田さんの穏やかなお人柄とともに時々語られる「強い想い」に、多くのことを感じとったようでした。最後に、それら感じたことや疑問に思ったことをクラスごとに集って伝え合い、さらには学年全員で共有しました。千田さんは、その一つ一つに対して、丁寧に回答下さり、私たちにとって大変充実した時間を過ごすことができました。

以下は、生徒達の感想の一部です。

- 印象に残った言葉は、「仲間に支えられないと乗り越えられない」ということです。
- まだ13歳のこの僕には、選択肢がたくさんあると気付いた。挑戦をたくさんしたい!!
- 千田さんの勇気と根性を見て思いました。千田さんは、努力の天才です。



造形芸術科 「第28回卒展」



附属聴覚特別支援学校 教諭 藤本裕美子

造形芸術科では、毎年1月に卒業を控えた2年生が「卒展」を開いています。今年度は3名の生徒が、1月26日～31日に市川市にある芳澤ガーデンギャラリーで2年間の学びの成果を展示しました。

油彩、イラストレーション、構成デッサン、フォトコラージュなど、さまざまな作品がギャラリーを彩り、生徒自身「3年間でこんなにたくさんの作品を創り上げてきたことに驚いた」と感想を漏らしていました。作品の中には、市川南口えきなん図書館から依頼を受けて制作したポスターや、銀の鈴社より出版された詩集の裏表紙に採用された絵画作品、国立パリろう学校にプレゼントしたポップアップカードなど、外部機関との連携や行事で活用した作品も含まれています。

卒展初日は、市川ケーブルテレビによる取材があり、生徒はやや緊張気味でした。しかし、手話を交えてお話をしているうちに、自分の作品に対する思いを伝えたいという気持ちが高まり、お互いにサポートしながら堂々とインタビューを受けていました。その後も、来場してくださった方に積極的にことばをかけ、技法や工夫点、苦労したこと、コンセプトを笑顔で語る姿は印象的でした。

来場してくださった方からは、「こんなにも充実した展示は久しぶりです。3人の力を改めて見直しました。」「丁寧に説明していただき、楽しみながら、考えながら制作に取り組んでいることが伝わり心温まりました。」など、励みになるメッセージを数多くいただき、生徒たちは卒業後も制作活動を続けていきたいという思いが一層高まったようです。



東京都 肢体不自由特別支援学校 ハンドサッカー大会優勝



附属桐が丘特別支援学校 教諭 佐々木高一



ハンドサッカーは、既存の競技への参加が難しい障害のある子どもたちに合わせ、都内の肢体不自由特別支援学校の体育授業で考案されました。1チーム7人で行い、ポジションやルールは障害の状態に応じて工夫され、様々な実態の子どもたちが参加できる種目です。

東京都肢体不自由特別支援学校ハンドサッカー大会は、2018年2月17日（土）に行われた今大会で29回目となりました。年に1度行われる大会に向け、各校練習をしています。年を重ねるごとに規模が拡大し、現在は都内の肢体不自由特別支援学校19校が参加し、駒沢オリンピック公園総合運動場体育館で開催されています。

大会方式は、参加チームを風神リーグと雷神リーグに分け、それぞれのリーグで優勝を競います。今回、桐が丘は風神リーグで戦います。初戦の北・大泉特別支援学校合同チームとの対戦では、リードされる苦しい展開でしたが、逆転に成功し12-8で勝利。次の志村学園戦では、初戦の勝利の勢いを活かして13-8で勝ち、決勝戦に進みました。決勝では、あきる野学園との白熱の攻防の末、16-12で優勝することができました。2006年大会以来、12年ぶりの優勝となりました。そして得点王に眞神颯太さん、MVPに手島敬之さんが選出されました。日頃の練習の中から、生徒たち自身がお互いに高め合う努力が続けてきたことが、優勝という結果につながったと感じています。

ハンドサッカーは、勝利を目指し、自分のできることを活かして役割を担い、仲間と力を合わせてプレーすることに楽しさがあります。今回の経験が、生徒たちの豊かなスポーツライフにつながるきっかけの1つになればうれしく思います。



“第1回”のびのびまつりを開催しました

附属久里浜特別支援学校 教諭

河場哲史

この行事は、「本校の子供たちが、地域で生活する方々と触れ合って楽しむこと」と「地域の方々に子供たちのことを知ってもらい、より親しみをもってもらうこと」を目的としています。当日は、幼児児童とその家族、卒業生、児童デイサービス等の関係機関、地域の方々等、約200名が参加しました。開閉会式では、小学部の児童がみんなの前に出て、司会進行をしたり、楽器演奏やダンスを披露したりしました。他にも、影絵の公演や絵画教室、作業所等の製品販売やお弁当販売等があり、卒業生が経営するうどん屋さんの出店には長蛇の列ができました。京急電鉄からはキャラクターの「けいきゅん」もやってきて、楽しい内容のイベントとなりました。また、終了後に「第1回卒業生が集う会」を行いました。10数名の卒業生とその家族の方々が参加し、交流を深めました。



卒業生が集う会の様子



開閉会式での司会・進行の様子

附属高校とのミニ交歓会

附属視覚特別支援学校 副校長 石井裕志

本校高等部の交歓会委員が中心となり、附属高校とのミニ交歓会が3月9日に附属高校で行われました。事前に、2回の打合せを行い、本校からは16名、附属高校からは20名が参加し、それぞれが企画を分担して交流を深めました。

企画1「物当てゲーム」(本校担当)

お題を決めた上で、本校の全盲の生徒が、それに基づき、視覚障害者用の作図器を用いて図を書き、本校の弱視生徒と附属高校の生徒が当てて、班ごとに得点を競う。

企画2「クイズ大会」(附属高校担当)

附属高校のクイズ研究会が用意した問題に、班毎にボタンを早押しして回答して競う。

生徒からは、「少人数の班構成により、お互いに親しみをもって交流し、理解を深めることができた。」という声が聞かれ、お互いの工夫で内容の充実が図られています。



『ミライの体育館』を活用した交流活動

附属大塚特別支援学校 教諭

當眞正太

本校では、体育館の床にプロジェクションマッピングの映像を映して、子ども達の社会性の形成や創造的な活動を支援することを目指し、『ミライの体育館』というプロジェクトを筑波大学と共同研究を行っている。

交流会に向けて、事前に附属駒場高等学校の生徒が筑波大学サイバニクス研究センターで講義を受けて、プロジェクションマッピング用のコンテンツを作成した。

交流会当日は、最初に「名刺交換ゲーム」で、手作り名刺を交換し合った。次に大塚の出し物として、プロジェクションマッピングを活用した「アロハのダンス」を披露した。最後は、高校生が作成したコンテンツを用いてゲーム活動を実施した。高校生がグループ毎に考えたゲーム活動には、インバーダーゲームのような設定で、ステージ上のスクリーンとフロアが連動して、レーザービームが出てきて、高校生と大塚の児童がペアで避けるというゲームがあった。他のグループのコンテンツも創意工夫に満ちており、一緒に活動を楽しんだ。





第13回「科学の芽」賞

科学の芽 募集

第13回 朝永振一郎記念

朝永先生の言葉のように自然現象の不思議を発見し、観察・実験して考えたことをまとめましょう。素直な疑問・発見があるものを募集します。

ふしぎだと思ふこと
これが**科学の芽**です
よく観察してたしかめ
そして考えること
これが**科学の芽**です
そうして最後になぞがとける
これが**科学の花**です

2018 8.20月 9.22土

募集対象 小学校3学年～、中学校、義務教育学校、高等学校、高等専門学校、3年以上の専攻、中等教育学校、特別支援学校の個人もしくは団体、大学、大学院、研究機関、社会人、海外在住者も可（応募者本人が日本在住者とする）

作品要件 1. 1シート（A4判）10枚以内 2. 日本語で記述し、図表は必要に応じて添付する（写真・動画は添付可） 3. 学年・年齢に応じたテーマに沿った内容とする

審査方法 筑波大学教員、筑波大学附属学校教員及び他機関関係者等が審査・選考

審査結果発表 平成30年11月下旬、筑波大学ホームページに掲載

賞・記念品 科学の芽賞の受賞者は学賞及び記念品を贈呈する（学賞は賞状・賞品は図書・実験キット等とする）

表彰式・発表会 平成30年12月22日（土）筑波大学大会場

応募方法 附属学校教育局ホームページ <http://www.gakko.tsukuba.ac.jp/kagaku>より応募 14歳の若くは「申し込みフォーム」より応募（応募料は無料） 応募は、印刷用紙を添付し、封筒に入れて、〒112-0001 東京都文京区大塚3-29-1 筑波大学附属学校教育局 庶務課へ送付する

連絡先 庶務課 庶務係 電話 03-3942-6806

筑波大学 University of Tsukuba

問 <http://www.tsukuba.ac.jp/community/kagakunome/index.html>

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia

vol.42

発行日……平成30（2018）年5月31日
発行者……附属学校教育局教育長 茂呂雄二
発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800
デザイン……スピーチ・バルーン
印刷……広研印刷 使用紙：UJimax [日本製紙]

